

12 幕末、明治の中国像

竹 内 実

ここでは網羅的にさまざまな中国像を羅列しようというのではなく、主としてこんにちいう「日中関係」（それは「国際関係」でもあった）にたいし、どのような方策を立てていたか、という側面をみるつもりである。「中国像」というのは「中国観」といっても同じことであるが、「観」というほど確固たる哲学的な整理のない、漠然としたイメージを含めるため「像」を用いたのである。私がこの「中国像」をはじめて使ったのは一九九五年で、たぶん私が最初に使ったのではないかとおもう。

幕末の「中国観」になると、たいていの、いわゆる「志士」たちがもっていたはずである。それはまた「中国像」でもあったが、しかし、この両者には微妙なずれがあって、「中国観」はもっていても、「中国像」はあやふやなばあいも多かったように感じられる。しかし、それをここで、あえて問おうとするわけではない。

幕末においては、吉田松陰をとりあげる。吉田松陰は『講孟割割記』という著作があり、『孟子』という著作に接した態度、『孟子』読み解きから、彼の中国像を考えることはできよう。しかし、ここでは、彼の兄杉梅太郎宛書翰をとりあげる。

これは安政二年、一八五五年、四月二十四日付で、松陰は野山獄にあり、兄は松本にいた。前年の一月、松陰は下田で米艦によって海外に出ようとし、捕らえられた。

必要と考える箇所を下に引用する。

○国家の事非_レ囚奴所宣_レ言〔囚奴の言うはよろしきところにあらず〕。然_レども、上人の定論_{トク}篤と承知仕置度候〔承知つかまつりおきたくそうろう〕。覲見_{ヒケン}は處置の急は孟子に若くはなし。其要_{そのよう}二_フ〔ふたつ〕、安_{ズル}万民_一〔万民を安んずる〕（と）天下の才を得るにあり。来_{多士}〔多士よ来れ〕。

その規模は六十六国【藩のこと】一塊石となり、万国の夷輩_{そうぶ}を勤撫_{きんぶ}せしめ【亡ぼし慰撫する】、五大洲_{そうめい}の陋名を除き天朝の佳名を賜ふ。

大禁物は日本内にて相征し相伐すること誠に恐多し。

魯墨講和一定、〔魯墨の講和、一たび定だまれば〕決然として我より是を破り信を戎狄_{じゅうてき}に失ふべからず。但_{ただし}章程〔法律規則〕を厳にし信義を厚ふし、其間を以て国力を養ひ、取易き朝鮮・満洲・支那_{したが}を切り随へ、交易にて魯国に失ふ所はまた土地にて鮮満にて償ふべし。長崎に来るものはその事體_{つまびら}を審_{はら}にし、絶つとも勤_{ほろぼ}するとも何ぞ策なきを憂へん。

【中略】

豊大閣程_{ほど}の雄才にてさへ、惜哉_{おしいかな}天下分争の日に生れ候_{そうらい}て、神州_{はつらん}の撓乱〔乱れた世をなおす〕に手間取_{てまどり}候_{そうろうゆえ}故、遂に明国手に入らずして歿せられ候。況んや今国内に事起り候ては外国へ手のはび不_レ申〔もうさず〕、大機を失ひ、洪秀全等が清国を偽定し、朝鮮も満洲も随従して、彼より先に我関_{たつきそうら}を款_{たき}候はゞ、大遺憾不_レ過_レ之候〔大遺憾これにすぎずそうろう〕。何卒比論を以て幕府を一動し度もの也。（広瀬豊編『吉田松陰書簡集』〈岩波文庫〉）

上のなかに「上人」とあるのは僧月性。西郷隆盛とともに海に沈んだ僧月照とは別人である。吉田松陰は兄をつうじて文章を交換した。交換する文章なので、まず「獄是帖」と名づけて、手紙の本文を書いている。

吉田松陰の前述の手紙は、こんにちからみれば、「侵略主義」（かりにこう名づけるとすれば）の発露といえよう。「取易き朝鮮・満洲・支那を切り随へ、交是にて魯国に失ふ所はまた土地にて満鮮にて償うべし」という箇所は、まさにそれを端的にあらわしている。松陰の中国古典についての教養はかなり深いものがあり、右の手紙をもって、中国についてまるで無知の人間の誇大妄想であるとかたづけるわけにはいかない。たとえば、ある人に宛てた手紙に、熟読玩味すべき中国の文章として、つぎの各篇をあげている。（嘉永四年、一八五一年十一月六日付）

出師前後表（諸葛公） 上高宗封事（胡澹菴） 争臣論（韓文公） 与韓愈論（史書（柳々州） 上范司諫書（歐陽公） 与高司諫書（同左） 桐葉封弟辨（柳） 審勢審敵（蘇老泉） 送石冒言北使引（同左） 策略五（蘇東坡） 待漏院記（王元之） 相臣論（明季魏叔子） 上宰相第三書（韓） 至言（漢賈山） 拔本塞源論（明王用明与某人書、今偶某名を忘失す。伝習録中に収む） 諫官題名記（司馬温公） 管仲論（老泉） 岳陽樓記（范希文） 凡二十篇

このほかに、読むべきものは多いが、思いだすままに書きつけた、と松陰はつけ加えている。そして、「日課を立て三篇あるいは五篇を四、五回ほども朗誦し、然るのち官府に登り職事を処する時は、事甚簡要にして心気を養ふの益は日（に）深かるべくかと窃に愚考仕り【下略】」といている。おそらく、なにかの役職についている武士から、読書のしかたについて質問をうけて答えたのだあろう。

私は右の二十篇のうち、ほんの二、三篇しか知らないのであるが「朗誦」することは、古典に親しむよい方法であり、精神衛生上にも効果があることはいえる。

問題は、こうした中国の古典を読む男が、どうして、いささかのためらいもなく、「侵略主義」の言辞を吐露したか、ということである。

一種の危機感があったということはいえよう。ロシアは大国であり、これと貿易することは必ず日本に損害をもたらすと考えていたことは、右の手紙にもみられるとおりである。さらに洪秀全の太平天国の勢力も、危機をもたらすと考えている。そこで、ロシアから受けるであろう損害をとりかえすため、洪秀全が中国全土ばかりでなく、いまの東北や朝鮮半島にも勢力を及ぼすかもしれないため、さきに、「切り随へ」たほうがよい、というのである。豊臣秀吉を肯定的にみているのも、こうした考えに出発してのことである。

よく知られているように、吉田松陰は数え年三十歳で死刑している。かれは頑固なまでに「尊王攘夷」論者であった。彼がもし、四十歳、五十歳、あるいは六十歳まで生きたとしたなら、さらに、つぎの思想の展開をみせたであろうが、運命は、彼にそれを許さなかった。こういうばあい、「時代的限界」とか、「思想的限界」を指摘するのがつねであるが、私は、そのような「限界」を指摘しても、あまり意味がない、と思う。それよりも、こうした、情勢把握が、国際的な情勢を知ることよりも、それに、いかに対処すべきか、という政策立案へ、思考が走っていくのが、いわゆる「志士」の発想のしかたであったらうということを指摘したい。

情勢に対処するとき、思考のパターンが「志士」にはあった。それは、「合縦連衡」論である。戦国時代、抬頭する秦にたいし六国がタテに連合して秦に対抗しようというのが蘇秦の説で、これが合縦論である。これとは逆に六国がヨコに秦に仕えようというのが張儀の説で、連

衡論である。

日本は儒教を輸入したというのが定説であるが、そして儒教の影響をうけたという事実も否定できないが、だからといって、『論語』『孟子』を（それだけを）尊崇したというのではないことも指摘したい。つぎの手紙は、松陰がいかに蘇秦、張儀にかぶれていたかを証明するものといえよう。

安政元年、一八五四年三月四日付で、兄とともに江戸にいた松陰は、兄から活動をしばらく控えるよう忠告されたので、これを誓いの言葉として書いた。

今甲寅の歳より壬戌の歳まで、不_レ言_二天下国家之事_一〔天下国家のことをいわず〕、不_レ為_二蘇秦・張儀之術_一〔蘇秦・張儀の術をなさず〕退_レては蠹魚となり、進_レんでは跋_二涉天下_一〔天下をあるきまわり〕、熟_二覽形勢_一〔情勢をみ〕以為_二他年報_一国之基_二耳_一。富獄雖_レ崩、刀水〔利根川〕雖_レ涸、誓不_レ負_二比言_一也。〔署名宛名日付略〕

右の「誓い」に「不為蘇秦、張儀之術」とあるのは興味深い。

これは日本における儒教の受容の一つの側面を端的にあらわしているものと考えられるのである。儒教のおしえ（徳目でいえば仁、義、礼、智、信、勇など）が民衆にまで浸透したことをもって、儒教の受容とみるみかたに、私は反対しない。また、朱子学が日本にはいったことにより、朱子の強調した「道統」を重んじる考え方が水戸学の一つの重要な概念となったことを、私は否定しない。「道統」重視は、なにが「正統」であるかという、中国の知識人の熱中する議論と表裏一体となり、これが日本にはいると、「天皇が正統である」という尊王討幕の論理になるのだと思う。

徳目の重視、正統論の重視はまさしく儒教を受容したと称されるにふさわしい内容である。しかし、儒教の受容の担い手であった日本のサムライたちは、四書だけを讀んだのではなかった。歴史の書物を好んで讀んだのである。『春秋左氏伝』、『史記』、『漢書』、『後漢書』、『呉越春秋』などが熱心に讀まれている。獄中の松田松陰もしきりに、『史記』のさしいれを求めている。

これは私の想像であるが、こんにち小説（とくに大衆小説）讀まれるようにして、『史記』は讀まれたと思う。娯楽だったのである。武士階級は支配者であるから、町人と同じ娯楽を求めることは許されず、自分でも束縛があったであろう。そういう窮屈な生活のなかでの娯楽であった。

とくに幕末の物情騒然とした時期に蘇秦、張儀を気どって友人と議論し、いくらかは実行を試みるのは、気分的にも爽快であったろう。当時の「藩」は、中国の戦国時代の「六国」に相当し、さらに日本に開国を迫る外国は、強暴な「秦」とそっくり眼に映じたのだと思われる。

松陰は、おそらく兄の杉梅太郎から、「蘇秦、張儀を気どるのはやめろ」と訓戒され（あるいは叱責され）、兄にいわれるとおりに「誓い」を書いたものと思われる。兄の杉梅太郎の叱責は、凶星であって、松陰はいいのがれできなかったのである。

吉田松陰の「侵略」のプランは、しかし、具体性を欠くものであった。「朝鮮、満洲に臨んとならば竹嶋は第一の足溜りなり」と竹嶋の開墾を指摘している（桂小五郎宛、安政五年、一八五八年二月十九日）のは、日本と韓国の論争のある竹嶋にいちはやく注目したものとして、

それはそれなりに意味があったかもしれないが、外国を侵略して占領するということをいかにも安易に考えている議論でしかない。世界の大勢を考えるのはよいとしても、自分の国の力にたいする反省もなく、軍事的な戦略戦術があるわけでもない。まして相手の国力も知らず、民衆の生活ぶりも知らず、知らないということについての自覚もない。いわゆる「志士」の「横議」はこの程度のものであった。「地域研究」の欠落した「国際関係論」のようなものである。

同じような合縦連衡論として、^{いわがき}巖垣月忞洲『西征快心篇』（安政年間の著作と思われる。1857年ごろ？）がある。

これは水戸斉昭（烈公）が兵八千、軍艦十隻、汽船四隻をひきい、中国、インドを經由、ロンドンを奇襲し、女王を人質にとり、イギリスをロシア、ドイツ、オランダ、フランス、スペイン、ポルトガルに分割して凱旋、清国皇帝から労をねぎらわれたあと、日本に帰るという筋の物語である。遠征を画策する相手としては、魏源が登場する。

魏源が登場するのは、『海国図誌』の著者として名が知られていたからであろう。水戸斉昭の「西征」、イギリス進攻の目的は、イギリスの侵略下において苦境におちいつている清国を救うためである。清国に侵入したイギリス派遣軍と戦うよりも直接、本土を奇襲したほうが効果がある、という戦術である。アヘン戦争の情報は日本にも伝えられていたこと、それにより、日本に一部に強い危機感が生じていたこと、がこの小説を構想させたのであろう。

まえのほうで、松陰の「侵略主義」という表現をカッコ（「J」）をつけて、私は記したが、松陰の「侵略主義」はイギリスの侵害によって呼びおこされたものであった。私はイギリスが中国を侵略したから、日本も中国を侵略してよい、といおうとしているのではない。明治以後の日本の朝鮮侵略、中国侵略のルーツ（根っこ）を探して歴史を溯れば吉田松陰にたどりつくし、その吉田松陰が肯定的に評価している豊臣秀吉にもたどりつく。これは歴史的事実である。しかし、豊臣秀吉、吉田松陰に、彼らが死んだあとの歴史上の事件の責任を負わせるわけにはいかない。したがって、吉田松陰については、私はカッコつきの「侵略主義」の発想がみられるを記したのである。このカッコをとりはずすことはできないのである。

カッコを付したのは、死後の事件ときりはなすためであるが、いま一つは、すでにのべたように、中国の歴史の書物を一つの娯楽として読んでいた結果、「合縦連衡」策というものが、現実の国際関係を理解する枠組として使われている、という、私の理解にもよる。じっさいのところ、当時の「志士」たちは国際関係をどのようにとらえたらよいか、これにどのように対処したらよいか、わからなかった。彼らは、イギリスについても、イギリス以外の国についても、ほとんど知らなかった。なるほど『海国図誌』という書物は日本でも普及した。しかし、それとイギリスその他の国の実情を知るといことは別個である。いかに知らなかったかは、『西征快心篇』が示すとおりである。「合縦連衡」策によって、考えに考えた結果がこれであった。イギリスは秦であり、イギリス以外は六国であった。六国と秦のあいだに矛盾があったように、イギリス以外の諸国とイギリスのあいだには矛盾がある。それでイギリスを解体分割し、これをロシアなどにあたえばよい、という解決策がでてくるのである。

吉田松陰が肯定的に豊臣秀吉を想起していることは、侵略され側からみれば許すことができないであろう。しかも、松陰の「侵略思想」が一個人の思いつきではなく、歴史的背景をもつ、

体系的な思想であることの有力な証據となるであろう、こんにちのわれわれとしては、豊臣秀吉の行動はまったく理解に苦しむ、誇大妄想としかおもえないが、しかし、侵略された側が、豊臣秀吉にはじまる、一つの思想的傾向を抽出するに足りる有力な証據となるものであろう。

幕末から明治時代に時代が下がると、中国像についての事例は増加し興味をひくものが少なくないが、ここでは、岡千仞の中国紀行『観光紀游』をとりあげる。

岡千仞は幕末に昌平黌に学び、仙台養賢堂教授。維新後は太政官修史局、東京府学教授、東京圖書館長。著書には上記のほか、『塩松勝概』、『仙台史料』などあり、『尊攘紀事』がもっとも評判になった。訳述に『法蘭西志』、『米利堅志』などがある。天保3年、一八三二年～大正二年、一九一三年。仙台の人。字は振衣、号は鹿間。(この項、『対支回顧録』下巻422～425頁、岡千仞の項、ほかによる。)

『観光紀游』は明治二五年、一八九二年十一月、著者によって発行。巻頭の「例言」は明治十九年、一八八六年七月。中国に旅行したのは明治十七年、一八八四年五月二九日、新橋駅を出発、横浜から汽船に乗船、上海に到着したのは六月六日。以後、蘇州、杭州、紹興、余姚、慈溪、鄞県(寧波)、柯山、芝罘、天津、北京、保定、広東、香港などをまわった。帰国して横浜に到着したのは翌年四月十八日。三百五十日にわたる大旅行であった。

人情、風俗、習慣を観察記録し、風景についてはあまり描写しないが、上海市街などについては、明治の錦絵をみるような、記述がみられる。

経歴にみられるように、彼は漢学者であった。したがって、『観光紀游』も漢字によって記されている。司会、彼は、漢学者という呼び方から連想される頑固な保守派でなかったことは、その記述書からもみることができよう。

岡千仞は旅行中によく中国の知識人と面談している。中国語は話せなかったから、筆談であった。岡は中国をじっさいに訪ねて、なにを発見したかといえば、「煙毒」と「経毒」であった。

上海に到着した岡は、「煙毒」に直面した。明治のはじめに日本に來訪した中国の文人は、大歓迎をうけた。なかでも、王韜にたいする歓迎は盛大で、日中交流史研究ではよく知られている(実藤恵秀「王韜の來遊と日本文人『近代日支文化論』所収、大東出版社、昭和十六年十月、にくわしい)。

岡は王韜を歓迎したひとりであり、王韜のすすめもあって、中国旅行を試みたので、上海に到着したその日に、王韜を訪問した。その翌々日、岸田吟香から、先日の面談中に王韜が頭痛を訴えて中座しようとしたのは、おそらく阿片中毒のゆえである、と告げられたのである(六月八日の条)。

翌日、中国の文人数人が來訪したさい、阿片の害毒が中国にひろがっていることに話がいった。岡が、「紫詮(王韜の字)のような方まで吸飲しておられるそうですが」というと、なかの一人が、「世界のなりゆきを憤慨する人が、心の無聊をまぎらすために吸うのでしょうか。愚昧なる小民ばかりでなく、聡明なる士人まで中毒になることがよくあります」と答えた(六月九日)。

上海市街を散歩していて、「洋煙」の看板がかかっているのを見、建物のなかにはいり、そこでみた光景をつぶさに記してもいる(六月十一日の条)。

その後、船をやとって蘇州、杭州に遊んだとき、蘇州の運河でとなりあった船に乗った貴族が「毒煙を吹いて妖臭紛然、終夜絶えず」であったことも記している（七月一日）。

また船を牽く人夫がよく艱苦に耐えるのをみて感心したものの、その人夫たちが、わずかな休憩時間に何片を吸うありさまをみて、「毒煙以外、人生に楽事あるのを知らないもののである」とも歎じている（八月十九日）。

ある宴会のあと、しばらく雑談したさい、宴会後の阿片吸飲のしきたちについて、岡が痛烈に批判した。そのとき相手がつぎのように答えるのをきき、阿片の害毒がこのような極点にまでたっているが、と慨歎にたえなかった。

「阿片を吸うことは一般の習俗になったから、聖人が出現しても、これを救うことはできない」

岡千仞が物のなかにはいり、そこでみた光景をつぶさに記してもいる（六月十一日の条）。

その後、船をやとって蘇州、杭州に遊んだとき、蘇州の運河でとなりあった船に乗った貴族が「毒煙を吹いて妖臭紛然、終夜絶えず」であったことも記している（七月一日）。

また船を牽く人夫がよく艱苦に耐えるのをみて感心したものの、その人夫たちが、わずかな休憩時間に阿片を吸うありさまをみて、「毒煙以外、人生に楽事あるのを知らないもののである」とも歎じている（八月十九日）。

ある宴会のあと、しばらく座談したさい、宴会後の阿片吸飲のしきたちについて、岡が痛烈に批判した。そのとき相手がつぎのように答えるのをきき、阿片の害毒がこのような極点にまでたっているのか、と慨歎にたえなかった。

「阿片を吸うことは一般の習俗になったから、聖人が出現しても、これを救うことはできない」

岡千仞が慈溪にいったのは、王硯雲（楊斎）に招待されたからで、王とは横浜からずっといっしょに旅行してきたのである。蘇州・杭州への船旅の途中、慈溪で上陸して、王の家に泊り歓迎された。王は三代同居の大家族で、邸宅は十数区に区画され、男女の使用人だけで六十～七十人いた。硯雲と筆談するうちに、この大家族、大邸宅の病根を理解した。ちなみに、王硯雲は挙人に合格していた。千仞はつぎのように記している。

子供が八、九歳になると、必ず教師を招いて科挙のための勉強をさせる。婦人の部屋は美麗をきわめ、赤く塗られた寝台は帷帳を四方にたらし、価格は四、五十元から百元にもたつする。自尊心が高く、衣食の憂いもなく、やすらかに満足している。しだいに驕奢に流れ、子弟にしても、読書を好み、才気のある者はもっぱら八股の学に精神を消耗している。何回か試験に落第したものは不平を酒色にまぎらし、頹廢に身を崩して、世間の事情に無関心になる。猖狂を達、放誕を豪、妄庸を賢、迂疎を高ととりちがえ、阿片に溺れて破産し、娘を売り、生命を縮めて、なお後悔しない人もいる。私はここに来て何カ月か経ったが、ほぼ中土の病源を理解したので、ここに記しておく（七月二十五日）。

岡千仞のいう「経毒」というのは、以上のように、ただただ「科挙」に合格することに自分の一生を消費することをいっている。合格すればよし、合格しなければ自暴自棄になって、自分をダメにする。そのような体制に岡は賛成できなかったばかりでなく、いわゆる「士大夫」

層がこの体制に疑問をいだかないことにも、岡ははなはだ不満をおぼえた。さらに、西洋の事情にうとく、機械文明をまるでみとめないことにも、不満であった。

岡があまりに「煙毒」「経毒」を批判するので、王硯雲もついに反論した。反論にさいして激昂のあまり、つぎのようにのべたのである。

「機械については聖人がいわれているではありませんか。いたずらに国人を率いて質実を去り、機巧に趨らせるだけのものです」

「イギリス、フランスは豹狼です。人間の道理をもって論じてよいわけはありません」

岡は硯雲が「機械」に反対するのに「聖人」をもってくること、イギリス、フランスを「豹狼」とみることに反論しているが、しかし、アヘン戦争いらい、当時の中国がおかれた情勢をみれば、硯雲の考えが無から有を生じたものでないことは、理解できたはずである。しかし、この私（竹内）の論文を読まれる多くの読者は、王硯雲の言葉はあまりにも世界の大勢について認識不足だと感じられることであろう。

岡の結論はこうである。

いまや風気一変、万国交通し、この五大洲は大きく変わろうとしている。それを頑固な儒者はなにかといえは経史を引用し、陋見を主張し、宇内の大勢がここまで変わっている様子を知ろうともしない。私が思うに、煙毒と六経の毒とをきれいに洗ったうえでなければ、中土のことは着手できないのではないか（八月五日）。

岡千仞の中国像の枠組は福沢諭吉の「脱亜論」（明治十八年、一八八五年三月）にほとんど同じである。しかも（活字になったのは遅いとはいえ）彼は「脱亜論」より一年はやく、同一の立場に立っている。したがって、明治十年代においてすでに形成されつつあった中国像の一つの型を示すものといえよう。

岡千仞の「煙毒・経毒」説は、福沢諭吉の中国像と、まったく一致する。

当時、福沢は「時事新報」に挿絵を描いていた甥の今泉秀太郎に「北京夢枕」と題する漫画を描かせている。肥満した巨大な中国人が四書五経を枕に横臥し、阿片の煙を大きな法螺貝のかたちにかきあげて、昼寝している。これにたいし、欧州各国の軍隊がガリヴァーの小人国の兵隊のように、足や腰のほうから攻めよせている。

ヨーロッパの文明こそ文明であるという観点にたつて、ただ中国文化圏内にとじこめることは愚かである、という批判である。このような批判のしかたにおいて、岡と福沢は一致するのである。

結論を記さなければならない。

「合縦連衡」説から「煙毒・経毒」説へ変わったのが幕末から明治にかけての日本（知識人）の「中国像」であった。このような変化をつうじてみられるのは、日本（知識人）のあまりにも観念的な思考方法である。

「合縦連衡」説も「煙毒・経毒」説もたしかに当時の中国、清王朝の病根を指摘している。病根を指摘された側としては、それを否定するのは困難だろうと、私は考える。清王朝の当局者、知識人は、日本のこのような指摘に真剣に耳を傾け、病根をとり除く決心を下すべきであったはずである。しかし岡千仞が経験したように、中国（清王朝）の知識人はむしろ反撥したの

である。そして、日本の知識人はそのような反撥に、不満をいただいたのであった。

結論には提案が含まれていなければならない。

私の考えでは、「合縦連衡」説も「煙毒・経毒」説も、相手のおかれている境遇をじゅうぶんに理解していないと思われる。じゅうぶんな理解がないにもかかわらず、一般的普遍的な真理を相手におしつけることは傲慢にみえるであろう。しかし日本の「志士」も「漢学者」も、自分が傲慢にみえるということを自覚しなかった。ここに歴史の教訓があると思う。

今後は相互理解の時代である。日本側の理解を中国側としてどのように理解するか。これはつぎの課題として残し、かつ期待したい。

(了)